慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	四平戯（その2）：福建省政和県禾洋村の祭祀芸能
Sub Title	Sipingxi (2)— Fujian Province Zheng he Prefecture He yang village's Public Entertainment Festivals
Author	野村, 伸一(Nomura, Shinichi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・ 文化・ コミュニケーション (Language, culture and communication). No.38 (2007. 3) ,p.77- 102
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20070331-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

四平戯（その2）
――福建省政和県禾洋村の祭祀芸能――

野　村　伸　一

2006年8月17日（旧7月24日）から三日間，福建省政和県禾洋村で李氏宗族によっておこなわれた例年の祭祀儀礼および四平戯を参観した。四平戯は2005年に近隣の政和県楊原村ではじめてみたのにつづいて，2度目である。楊源村とはまた違った祭祀状況のなかでの四平戯であり，興味深いものがあった。以下は，その報告である[1)]。

1. 禾洋村概況

福建省政和県禾洋村（図版1）は幹線道路から離れて，かなり奥まったところに位置するが，現地にいってみると，存外農地が広がっている。禾洋村は禾洋，北坑，下布坪の三つの自然村落からなる。全体で戸数150，人口は1075人。うち李姓は558人，約52％を占める。土地は肥沃で主として稲作をし，ほかに野菜栽培をしている。

▲図版1　禾洋村。村の入口からの眺め。

李氏の同族村落　禾洋村では毎年，旧暦7月24日から26日までの3日間，東平尊王（張巡　709–757年）の祭儀をおこなう。禾洋村は李氏の同族村落であるが，唐王朝の始祖が李氏であり，また張巡は安史の乱において殉死したことから，これを東平尊王として手厚くまつっている。伝承によれば東平尊王の誕生日は7月25日である。禾洋村の祭儀がいつからはじまったのかは資料がなくて，はっきりしないが，禾洋李氏の族譜によると，明代中期にここに移り住んだということから，およそ，その頃からのものと推定される。

東平王についての信仰　張巡をまつる廟は村の入口にあり「東平尊王廟」とよばれ

▲図版２　東平尊王廟。村の入口に位置する。

▲図版３　東平王張巡と蔡（右），呂夫人（左）。

▲図版４　福建東部，北部で広くまつられる陳靖姑臨水夫人とその部下。

▲図版５　閭山三聖尊王。

ている（図版 2）。廟内には，中央に張巡と二人の夫人（図版 3），また正面右側に陳靖姑（臨水夫人）とその部下（図版 4），左側に閭山三聖尊王（図版 5）がまつられている。なお，伝承によると，張巡は睢陽（河南省商丘県の南）の地で殉死し，のち，その地に祀られた。さらに，その神格は江淮（揚子江と淮河）一帯に広く受けいれられて祀られた[2)]。

張巡は宋代に広く信仰されて東平王とよばれた。そして，江淮の道士の説によると，東平王は皇帝により「瘟部帥とされ，人びとの善悪を観察して賞罰をくだす」といわれている。人びとは水旱や癘疫に遭うと必ずこれに祈禱し，また，そうすると必ずこたえてくれるという[3)]。

張巡への信仰は福建省でも大いに流行した。とくに中部の莆仙地区と閩北で顕著である。莆田ではこれを「司馬聖王」とよび大多数の社廟でまつっている。また閩北のばあいは，建寧府に所属した政和，松渓，建甌の各県で東平王をまつっている。一般には東平王は畏怖すべき神で，人びとは敬して遠ざけることが多いのだが，禾洋村の李氏ではそうではない。その祭儀においては，これを福首の家に迎えてまつり，送り返している。これについて，禾洋村の人びとは，次のようにいっている。すなわち「東平王は天下〈李家〉の大忠

臣であり，自分たち李姓の大恩人である。従って感謝の意を込めて毎年，誕生日を祝っている」と[4)]。

かつては禾洋村に南峯庵があり，ここで2月19日には観音の誕生日としてまつりをしていたというが，今は建物の跡形もない。禾洋村では正月の元宵節も7月の祭儀に較べると，さほど盛大にはまつらないという。ただし，祭儀のなかでは，観音や土地公にも供物が供えられ，手厚いまつりがみられる。要するに，禾洋村では，こうした神がみの中心に東平王を安置し，7月の祭祀を最も盛大におこなっているのである。

2. 十家福首

十家福首　禾洋村の最大の祭儀を担当するのは毎年選任される「十家福首」と陰陽（法師）である（陰陽については後述）。

十家福首の選定は次のようになされる。すなわち，禾洋村は大きく三つに分かれているので，それぞれから三名ないし四名を選出して十名にする。これを福首会とか十家福首とよんでいる。彼らは，祭儀の初日（7月24日），まず東平王廟内で祈願をし（図版6），そのあと廊橋（水尾橋）の方に移動する（図版7）（図版8）。そして廊橋内の神座の前に並ぶ。すると，村の陰陽先生が彼らの前で占いをし，この10名のうちから，福頭（総福首）を選ぶ（図版9）。福頭は最も福気のある人とみなされる。

▲図版６　東平王廟内での福首らの祈願。

福頭を選んだあとで，しばらく音楽の演奏がある。そのあと，昼食をはさんで，東

▲図版７　神がみの廊橋（水尾橋）への移動。

▲図版８　廊橋。このかたちの施設は福建省でよくみられる。

▲図版９　陰陽先生が福首のなかから福頭（総福首）を選ぶ。

▲図版 10　福頭の家までの行列。粽を分配する。

▲図版 11　田のほとりをいく神と村人たち。

▲図版 12　福頭の家の二階に安置された東平王。

平王夫婦は神輿に載せられ福頭の家に向かう。村人が大人も子供も総出で行列を作る。この間，村人が手分けして作った粽が参列者に配られる（図版 10)（図版 11)。粽はかつてはごちそうで，この祭儀のあいだ至るところで食べられる。まもなく福頭の家に着く。すると，東平王と一行は供物をもって迎えられる（図版 12)。東平王夫婦はここで一晩を過ごす。東平王夫婦が留まることは福頭家への祝福となる。

ちなみに，2006 年は閏の 7 月があり，一年に二度 7 月を迎えた。禾洋村では，これに対して省略することなく，二度の 7 月に，それぞれ同じ祭儀をやった。そして，そのための福首はそれぞれ別に，10 人ずつ選定した [5)]。禾洋村では，張巡はほとんど祖神のような扱いである。

四平戯班との関係　この十家福首は祭儀活動全般に対して責任を負う。従って，四平戯の演員（役者，楽士）たちにも酒食を提供する。十家福首は一面では宗族を代表しているといえる [6)]。そして，十家福首は 7 月の東平王の祭儀のほかに，結婚式などの慶事があると，四平戯班を組織させ，その家にいかせる。演員はそこで「撒帳歌」[7)] や折子戯のう

ちの何段かを歌う。なお，この時の報酬は，十家福首が受け取る。彼らは四平戯班を管理する者たちでもあった[8)]。十家福首は祭儀に先だって，それぞれ三百元を出し，祭儀後に決済する。

3. 祭儀次第

準備　十家福首の方から祭儀用の豚が提供される。福首役は前年の7月27日には決定されていて，彼らは一年間祭儀用の豚を育てておく。ただし，十軒の家がことごとく豚を提供するわけではなく，2006年には三軒の家からの提供があった（図版13）。豚は7月24日の明け方に屠（はふ）る。このとき，豚の内臓はすべて祭儀に用いる。また肉は一部，自分たちの家庭で使うほかは，祭儀後にすべて村人たちに売り払ってしまう。

▲図版13　福首の家で一年かけて育てたお供えの豚。背に庖丁が立ててある。

十家福首のほかに，各家々から粽と現金の提供がある。2006年には46軒から，粽736斤，現金で1395元の協力があった。粽を祭儀に提供するのはたいへん特徴的なことである。この政和県では，親戚間で粽をやり取りするのは重要な礼節行為なのだという。また，これを東平王に送るのは地域の平安祈願でもあるという。すなわち粽には四角（よすみ）があるところから，神に四方の平安を請願するのだという。いずれにしても，人びとは神にお供えしたあと，粽を家に持ち帰り家族に食べさせる。こうすると一年の平安を保つことができると考えるのである。われわれ外部の者にも行く先々で，このふるまいがあった。

四平戯班の準備は7月2日からはじまる。

陰陽先生　福建省の東北部では民間の道士を陰陽先生（あるいは単に陰陽）とよぶ[9)]。葉明生氏によると，陰陽先生には2種類ある。その一は在地の陰陽（本地陰陽）であり，その二は外地の陰陽（客家陰陽）である。

本地陰陽は葬儀を除いて，その他の儀礼（清事あるいは紅事）に携わる。すなわち村の人びとのための消災，祈福，過関［厄除け］，延寿などである。彼らは道教閭山派に属する（東平王廟内，正面左側に閭山三聖尊王の神像があったことが想起される）。一方，客家陰陽は清事も葬儀も担当する。彼らの祖先は福建省西部の汀州（現・長汀）からきた。道士

▲図版 14　代理の陰陽先生が村人とともに神に祈願する。

もあり，また法師もある。そして，そのいずれも道教閭山派と関係を持っている。

ところで，禾洋村では，代々清事を担う道師が儀礼をおこなってきたため，外地の陰陽はこれをすることができなかった。しかし，現在の四平戯班の責任者である李典亮は陰陽家の出身であるにもかかわらず，儀礼ができない。というのは，祖父や父親（李如俊）は陰陽であったものの，李如俊は時代の変化を予知し，息子の典亮には陰陽の修行をさせなかったのである。そのため，現在，禾洋村では，村内の李典主を陰陽の代理として簡単な儀礼をおこなっている（図版 14）。こうした事情のため，禾洋村では伝統的な陰陽先生の儀礼はみられなくなったといえるだろう。

祭儀の進行

禾洋村の東平王の祭儀は四平戯を含むものだが，同じく四平戯を伴う楊源村の祭儀と較べるとだいぶ異なる。それは次のように進められる。

1.　初日（旧暦 7 月 24 日）

東平王廟での祭儀　張巡の誕生日である 7 月 24 日，午前 8 時半頃，東平王廟での祭儀がはじまる。村の入口にある古廟で陰陽先生ほか福首が祈禱したあと，東平尊王と二人の夫人を近くの廊橋（水尾橋）まで移動させる（前掲図版 7 参照）。

▲図版 15　廊橋内の土主宮（土地神）。

▲図版 16　土主宮内の土地公夫妻と文武官僚。本境土主大王之神位とある。

▲図版 17　観音。右膝の上に子を置く。

▲図版 18　四平戯班による演唱。

▲図版 19　四平戯開始前に，八仙がやってきて東平王に祈りを捧げる。

廊橋には村人全員が集まる。ここには村の土地公（図版 15）（図版 16）と観音（図版 17）がまつられてある。そこにも供物が置かれ，人びとの拝礼がある。廊橋は暑熱を避ける施設の役割もある。福建ではあちこちにみられ，そのなかに神仏がまつられている。

東平尊王夫妻を安置したあと，豚と粽のお供えが並べられる。そして，神像と供物を前にして，陰陽先生が卜いをし，総福首すなわち福頭を選ぶ。そのあと，人びとの祈願，四平戯班による演唱がある（図版 18）。ここでは『英雄会』のうちの「王英下山」の段が歌われる。それは午後 2 時頃までつづく。

そして，それが済むと，廊橋からさらに福頭の家への行列がある。神がみの行列では大人に混じって子供たちも旗を持ち，つき従う。途中，子供らに対しては粽のふるまいがある。子供たちはもらった粽をたいせつそうにして持ち帰る。こうした子供らの参加により祭儀は生き生きとしたものになった。

福頭の家では二階に神の座が用意されていた。ここでは，陰陽先生の『消災経』の読誦がある。また夕刻，四平戯がはじまる際には，八仙がやってきて東平王に祈りを捧げる（図版 19）。これらは楊源村ではみられなかった。

四平戯の演目一覧

今回（2006 年）の三日間の四平戯の演目は次のとおりであった。すべて台本がなく口

頭伝承なので，台詞の細部は現地の人以外には知りようがない。

(1) 初日

夜：『八仙』『加冠』『魁星』『八卦図』

(2) 2日目

午前：『南陽関』

午後：『蘆花関』（薛丁山征西，薛丁山斬子）

夜：『八仙』（跳加冠）『英雄会』

(3) 3日目

午前：『花関索打牌』『王大娘補缸』

午後：『双龍記』

夜：『沈香破洞』（宝蓮灯，宝帯記。禾洋村ではこれは必ず最後に演じる。）

各演目の内容については後述する（「5. 主要な演目の内容」参照）。

2. 2日目（旧暦7月25日）

▲図版20　2日目の午後，廊橋内で陰陽先生が福首のために占いをする。

この日は午前中から四平戯が上演される。

午前中に，神がみは福頭の家から廊橋内の神の座に戻される。そして，午後1時ごろ，陰陽先生と福首らの祈禱がある（図版20）。そののち，神がみは前日とは別の道を通って演戯の会場に向かい，四平戯の舞台の前に安置される。四平戯は以前は李氏の祠堂の前の舞台でおこなわれたが，60年代，文化大革命の際，舞台は破壊されてしまい，現在，四平戯は村の会館のなかでおこなっている。そこは広さは十分なのだが，神事にはいささかそぐわない感じもする。古朴な村人の祭祀芸能であるだけに，祠堂と舞台が失われたのは残念である。

3.　3 日目

3 日目は，午前中に折子戯『花関索打牌』『王大娘補缸』，午後と晩は四平戯全本『双龍記』，『沈香破洞』の上演がある。午後 7 時半には東平尊王の前で，陰陽先生，福首らの祈禱がおこなわれる。そのあと，爆竹が鳴らされ，神がみは神輿に載せられて，廊橋内の神座へ帰っていく。

この間，舞台では最後の演目『沈香破洞』が演じられている。ただし，四平戯の会場は村人でにぎわい，演者の声がよく聞こえない。とくに子供らの快活な声は際立ち，大人が何度叱っても，話し声をやめない。この点は三日間を通してとくに印象に残った。とはいえ，晩の 10 時ごろになると，さすがに子供たちの声も聞こえなくなり，静かになった。

子供たちの真摯な神送り「咒塔子」　まつりの終幕に臨んで，さすがに疲れたのだろうとおもわれた。ところが，そうではなかった。四平戯の上演が終わった 11 時ごろ，廊橋の東平尊王の前では子供たちの祈りの場が設けられていた。この儀礼は「咒塔子」とよばれている。すなわち，村の子供らが 30 人ほど集まっている。そして，東平王とその夫人の神像に向かい，ひざまづき，手を叩きながら，一心に次のような咒歌「頼塔（方言。＝念呪）過案歌」を斉唱する（図版 21）（図版 22）（図版 23）。

里蔭（李英[10]）	陳李	通報天旨
東平尊王	有霊感応	
禾苗大熟	五穀豊登	
風朝雨順	国泰民安	
咒塔過案	郷村明静	
家家清吉	戸戸平安	

▲図版 21　子供らの見送りを受ける東平尊王。

▲図版 22　咒歌の斉唱。少女らの声が一際よく響く。

▲図版 23　子供らの手拍子は徐々に早まり，憑霊をおもわせる。

この間，陰陽先生が卜いをする。卜いは3回つづけて好ましい卦が出るまでくり返される。それを盛り立てるのは子供らの唱えごとである。やがて神聖な卦が出て，東平尊王が元来の村の廟に帰る意志があることが確認される。そののち神輿が出る。

これは夜更けの不思議な光景であった。かつて，子供たちの表情で，これほど真に迫る顔をみたことはなかった。しかも，ここでは，必ずしも東平尊王だけを崇拝するのではない。むしろ，それは臨水夫人を含めた村の諸神への切なる願いを大人に代わって祈っているかのようであった。

この三日間の祭儀後，一週間，村民はみな平安を保たなければならない。村内での音楽，爆竹は禁止される。こうしたことは楊源村のばあいと同じである。

4. 禾洋村の四平戯について

少ない演目　文化大革命により中断されていたため，禾洋村の四平戯は演目が少なく，およそ14本である。そのうち，今日，主として演じられるものは『蘆花関』『双龍記』『南陽関』などの六本である。そして，葉明生氏によると，「元明南戯および弋陽諸腔の演目」は少なく，多くは「明代の話本あるいは傀儡戯の〈話本劇〉と密接な関係」を持つという。またその歌い方も南戯の伝統を残すものは残っていないという[11]。

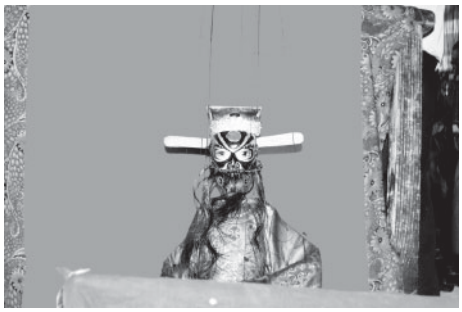
音楽は古式を保持する　ただし，演目は少ないものの，音楽の面では弋陽腔，四平腔の伝統を多く残しているという。すなわち，四平腔に関しては，管弦がなく銅鑼と太鼓だけであるといわれている。また「句調長短，声音高下」にしてこころの赴くままに歌う（『譚曲雑札』）。あるいは「字多音少，一洩而尽」といい，また一人が歌うと，数人が後につづく（『閑情偶寄』）などという。こうした特徴が禾洋村のばあいにもみられる[12]。

演戯の特徴　禾洋村の四平戯の演じ方は伝統に則るというよりは随意に演じている様子である。その基本となるのは『宝蓮灯』である。演員はみな，この演目を習得しなければならないという[13]。

全般的な特徴として，戦闘の場面が多いことがあげられる。これについて，葉明生氏は宋元時代の「冲撞［衝突する］雑劇」の名残であり，あるいは傀儡の演戯をまねたものかという。傀儡との関係ということではまた，化粧の仕方にも両者間につながるものがある。すなわち，額の中央に紅い点を付けることや跳ね上がった眉などは桃洋村の「清代傀儡戯の面相」と似ているという[14]（図版24）（図版25）（図版26）。

傀儡戯の影響　禾洋村の四平戯は傀儡戯を基にして人戯としたものであるということ

▲図版 24　四平戯の顔。額に紅い点，跳ね上がった眉。



▲図版 25　桃洋村の四平傀儡。包公。

▲図版 26　桃洋村の四平傀儡。娘娘。

は『中国戯曲志・福建巻』（1993 年）において，すでに指摘されていた。そのように断言できるかどうかはまだわからないものの，傀儡戯の影響が多分にあることは否定できないようである。たとえば，禾洋村の老傀儡師李式日（1921–）によると，演目や音楽は両者間でほとんど同じだとのことである[15]。

ちなみに，今回の禾洋村の祭儀と平行して，すぐ隣の北坑村でも東平王のための祭儀がおこなわれた。そこでは桃洋村の陰陽先生による傀儡四平戯が演じられていた。旧 7 月 25 日と 26 日，暫時，これを見学した。印象としては素朴な音楽は類似していたが，至近距離で鑑賞したためか，人の演じるものよりも素早い展開でむしろ密度が濃い感じがした。

そのうち『貍猫（リーマオ）［山猫］換太子』という演目はとくに印象的であった。物語は宋代のこと，息子を産んだ皇后の身でありながら皇帝（図版 27）の寵愛を失った女人が現れる。子には死の危険が迫る。しかし，さいわい赤子は貍猫とすり替えられ生き延びる。そのあと，后は子もろとも逃走する。ところが后は太子とも別れ別れになる。そのため，后は泣きくらし，ついに盲目となってしまう（図版 28）。そして庭州へと逃げていくと，包公に出会う。皇后は盲目となった由来を語る。

こんな場面が緊迫感を伴って演じられていた。この物語はまだつづく。いずれにしても，庶民が何百年と親しんできた物語なのだろう。人形の演戯，語りは実にうまい。傀儡の演じ手は桃洋村の張森声氏，昨年（2005 年），鉄坑廟で祭儀を担ったあの陰陽先生である。それにしても陰陽先生というのは庶民生活の実にさまざまな方面に活躍している。宗教と

▲図版 27　宋の皇帝。

▲図版 28　子と別れ，悲歎の余り盲目となった后。それと知らない者の仕打ちはつれない。

芸能がこれほどみごとに融合している実例もまためずらしい。

近隣への巡回　　かつて，禾洋村の四平戯班は近隣の村落に招かれて巡回した。すなわち，彼らは春節の農閑期や周辺村落の神落の誕生日に招かれた。村人の話によると，富坂，下畲，大渓，筠竹坑，東坑，岭頭などの諸村にでかけて四平戯を演じた。とはいえ，商業的なものではなかったので，報酬に決まりはなく，適当なこころづけをもらうだけであった[16)]。

四平戯残存の一因　　清代初期までは四平戯は福建全体に分布していた。ところが現在では政和県の楊源，禾洋および屏南県の龍潭ほか諸村に残存するばかりとなった。これらがかろうじて残ったのは交通の不便なところに位置したというだけでなく，宗族の祭祀演劇としておこなわれてきたことが一因だといえる。それは神に奉納する芸能だからこそ残ったのであろう。

5. 主要な演目の内容

2006 年の禾洋村の四平戯においてみられた演目のうち，主要なものについて梗概を記しておく。なお，以下の記述では，馬建華，葉明生両氏の助けを借りて記した部分が多い。

初日

王母娘娘と八仙　　『八仙』『加冠』『魁星』は，観客の祝禱のために，はじめに必ず演じられる儀式的な芸能である。これについては楊源村の四平戯において述べたものと大差はない。ただ，禾洋村の『八仙』では，王母娘娘が現れて，八仙に，東平尊王の聖誕の儀があることを告げ祝福にいかせるという物語がつけられている（図版 29）。初日に福頭の

▲図版 29　王母娘娘が八仙に，東平尊王の聖誕の儀があることを告げる。

▲図版 30　『加冠』における村人への祝福。

家の祭壇の前で王母娘娘（西王母）が三十三天の蟠桃会を催す。これにより，いわば慶事が重なっていることが示される。

また『加冠』では観客の子息の出世が予祝される（図版 30）。これはどこでやっても同じ趣向であるが，禾洋村の加冠の演戯では通常の演戯とは異なり，口を開いて天から富貴が到来することを告げる。すなわち「加官刻此来，凡民喜三台。南星朝北斗，富貴従天来，妙也」という。

『八卦図』　『八卦図』は『八百寿』ともよばれる。息子を科挙に送り出してから，父親の員外は占いにいく（図版 31）。すると，まもなく 80 歳，その歳で死ぬ相があるといわれる。実は占い師は妖怪であった。そうとは知らず，員外は苦悩する。そこへむすめ（実は桃花女）がやってくる（図版 32）。そして父親の苦難を救うために八仙に祈る。八仙は員外に対してそれぞれ 90 歳を授ける。もとからあった 80 歳を足すと，何と 800 歳である。こののち，桃花女は武当山大帝（図版 33）の力添えを得て，妖怪を退ける。一方，息子は首尾よく科挙に一番で合格する。員外はよき息子とむすめに恵まれて，親子はめで

▲図版 31　『八卦図』の員外（左）。寿命がほぼ尽きたと告げられる。

▲図版 32　『八卦図』の桃花女。父のために妖怪らと戦う。

▲図版 33　『八卦図』の武当山大帝。桃花女を助けて団円を導く。

たく団円を遂げる。

息子よりはむすめが武力を発揮して妖怪を退けるところが興味深い。こうした女性の活躍は楊源村の演目のなかにもしばしばみられた。このことは先に記した[17]。

2日目

『南陽関』　『南陽関』は隋代の話で，『破南陽』ともよばれる。清代初期の小説『隋唐演義』による物語である。隋の煬広（煬帝）は父や兄を殺して力により帝位を簒奪した。そして宰相伍建章に詔書を起草させようとするが，拒否される。煬広は腹を立てて，伍建章とその家族たちを殺す。さらに，煬帝は韓擒虎を遣わし，その子伍雲韶をも殺そうとする（図版 34）。伍雲韶は南陽関の元帥として敵兵と戦っていた。伍雲韶は煬広により父が殺され，しかも自分への追っ手がやってくることを知り，大いに怒る。そして，韓擒虎と戦って（図版 35），これを退ける。韓擒虎は一旦退いてから，宇文成都に命じて伍雲韶を攻撃させる。伍雲韶の妻は一心に祈禱する（図版 36）。しかし，伍雲韶は宇文成都との闘いに敗れ，妻は自害する。とはいえ，妻の犠牲のお陰で，伍雲韶は逃げ延びる。伍雲韶にはこの時，ちょうど息子が生まれていた。伍雲韶はその子を抱いて，関帝廟にいく。追っ手がやってきたが，友人朱燦の機知で，退けることができた。伍雲韶は子供の名として伍忠という名を授かる（図版 37）。伍雲韶は朱燦ほか何人かの仲間とともに煬広の軍に反撃する機会を窺う。一方，韓擒虎は事の次第を煬広に報告する。

『蘆花関』　『蘆花関』は京劇などでよく知られた「薛丁山征西」（薛丁山斬子）の故

▲図版34　煬広（中央）は伍雲韶をも殺そうとする。

▲図版 35　韓擒虎（左）と伍雲韶。

▲図版 36　妻は一心に夫伍雲韶の勝利を祈る。

▲図版 37　妻の犠牲で助かった赤子には伍忠という名が授けられる。

事のなかの一段である。この話は清代小説『征西全伝』（唐三伝）による。唐軍の元帥薛仁貴の息子薛丁山はもとは敵軍の女将であった樊梨花に救われる。そして樊梨花が結婚を申し込むが，拒否する。かつて樊梨花は薛丁山が危機に陥った時，これを幾度も救い，薛仁貴から結婚を許されていた。

時あたかも，唐軍に対して西方の蘇宝同の軍が戦いを挑んできた。そのため薛丁山は西の敵軍を討たなければならない。

このとき，樊梨花も唐軍の側に駆けつける。だが，その途中で，樊梨花は山賊応龍と出会い，これと戦うことになる（図版 38）。戦いに臨んで，二人はこんなことばを交わす。すなわち，応龍は，「もし戦いに勝利したら，自分の妻になれ」という。一方，樊梨花は子供がなかったので「もしわたしが勝ったら，お前はわたしの子になれ」と。結果は樊梨花が勝って応龍を子として従える。

樊梨花と薛応龍は薛丁山のもとへくる。すると薛丁山は樊梨花と薛応龍の関係を疑う。二人は争いをはじめる。だが，これは薛仁貴の部下である程咬金が取り持って仲裁する。一方，この時，唐軍は蘆花関において蘇宝同の率いる敵軍と戦うことになった。ちょうど，そのとき，薛応龍は白龍公主と戦い，相手に見初められる。そして，土地公の仲立ちで結婚してしまう（図版 39）。しかし，このことを告げられると（図版 40），樊梨花はこれを許さず，斬殺を命じる。しかし，薛丁山の取りなしで応龍は一命をとりとめる。ちなみに，斬殺の間際に救済されるという演出は他の芝居にもよくみられる。人びとの好むところなのだろう。

▲図版 38　樊梨花は山賊の応龍と戦い，これを義子とする。

▲図版 39　応龍は土地公の仲立ちで白龍公主と結婚する。

▲図版 40　応龍は結婚したことを義理の母樊梨花に報告する。

▲図版 41　鉄板道人により倒されてしまった応龍。

▲図版 42　義子の死を知り，敵軍との戦いに臨んだ樊梨花。

▲図版 43　薛丁山，樊梨花が李世民（中央）に戦勝を報告する。右端は程咬金。

さて，このとき蘇宝同は金剛陣を敷いて唐軍を殲滅しようとする。唐軍側では薛応龍や薛丁山が出て戦うが，敵には鉄板道人や飛鉢和尚がいて，かなわない。薛応龍は果敢に戦いを挑むが，鉄板道人により殺されてしまう（図版 41）。そこで樊梨花が登場する。樊梨花はこのとき，子を産んだばかりであったが，赤子を背負って鉄板道人と戦う（図版 42）。さいわい，樊梨花は，その産後の血が鉄板和尚の威力を殺ぐことになり，これを平定する

ことができた。こののち樊梨花，薛丁山らは戦勝を皇帝李世民に報告する（図版 43）。薛丁山には加冠三級，すなわち官位特進の栄誉が与えられる。

『英雄会』　『英雄会』は明清の戯曲である。『探五陽』『青銅棍』『三打王英』ともいう。ここでは，英雄たちを表向きの主人公としつつも，実は，話の要所においてはその妹たちが活躍する。すなわち女たちが国のためをおもって小皇帝を保護し，また恨みを抱く兄たちを説得し，ついには外敵を退けさせるという大衆劇である。

漢の光武帝劉秀が死んだあと，息子の劉庄はまだ幼かった。幼帝劉庄を率いた国母任蓮花とその弟任寿道，また劉庄の祖父劉唐は国政をないがしろにする。北からは匈奴が侵入してくる。劉唐は匈奴側と結託したが，結局，匈奴に殺され，洛陽は陥落する（図版 44）。国母と劉庄，任寿道は変装して洛陽城から逃げていく（図版 45）。このとき，任寿道は天仙公主に劉庄と同道することを命じる（図版 46）。

逃走の途次，母と子らは匈奴側に捉えられそうになる。しかし，そのとき，山賊となっていた王英が現れ，二人を救う。しかし，母と子は別れ別れになってしまった。当時，地方では国家に反逆する者たちが山に逃げ込んでいた。王英はそうした者のひとりであった。実は，光武帝は生前，讒言を信じて，功臣の姚期，王覇を殺してしまった。そのため姚期の子姚剛は太行山に逃げた。また王覇の子王英は二龍山に逃げていたのである。

小皇帝劉庄は祖聡の妹祖金蓮の家に逃げ込んで，身分を明かす。祖金蓮は劉庄を殺そうとするが，劉庄は青銅棍の力により守られて無事である（図版 47）。そればかりか，

▲図版 44　匈奴が洛陽を落とす。

▲図版 45　国母，息子劉庄，任寿道は都落ちする。

▲図版 46　劉庄（右から二人目）を守る天仙公主（左端）。

▲図版 47　劉庄は青銅棍の力に守られ，斬られない。

▲図版 48　祖聡は妹の心変わりを責め立てる。

▲図版 49　姚剛は立腹し，部下をして王英を痛打させる。痛めつけられた王英。

▲図版 50　英雄の妹たちの深謀遠慮。山寨を焼却する。

結局，祖金蓮は劉庄と愛し合うなかになる。漢朝に恨みを持った兄の祖聡は妹を責める（図版 48）が，妹に説得されて，劉庄を守る側に立つ。そこへ王英もやってくる。王英と祖聡の二人は力を合わせて劉庄を守ることにする。

ところで，事態がそのように進んでいることを知らないのは太行山にいた姚剛であった。そこに王英がやってきた。王英は漢朝が危機に瀕していること，それゆえ挙兵すべきことを姚剛に説く。しかし，姚剛は漢朝に対する敵愾心に満ちていて，王英を捉え痛打させる（図版 49）。その時，姚剛の妹が現れる。姚剛の妹は兄のこころが変わらないのをみると，王英を救出し，その上，山寨を焼却させる（図版 50）。姚剛は進退きわまり，結局，各地の英雄とともに漢朝を再興することに同意する。英雄らはともに下山して匈奴と戦い，これを平定する。姚剛，王英，その妹たちが皇帝の前に集まり，皇帝にその旨を報告する（図版 51）。英雄たちは諸侯に封じられる。

この物語は福建省では好まれていて，莆仙戯の演目としても知られている。また京劇では『太行山』として演じられている。2005 年旧暦 8 月の楊源村四平戯のなかでも折子戯

として演じられた。四平戯では，楊源でも禾洋でも妹が現れて男たちの諍いを仲裁し，ことを成就させる。この演出が一際印象に残った。

▲図版 51　西蕃平定の報告。左から姚剛の妹，祖聡の妹，祖聡，皇帝，王英，姚剛。

3 日目

『花関索打牌』　折子戯。楊源村四平戯の『挂牌大戦』（折子戯）[18] と同じものである。明代の高腔の演目『九龍記』の一節である。時は東漢（後漢）の末年，劉備，関羽，張飛が義を結んだ。そして災いを防ぐため，互いにそれぞれの妻子を殺すことにした。張飛が関羽の妻呉氏を殺すことになった。しかし，呉氏がみごもっていたため，殺すに忍びず逃してやった。のち，呉氏はわが子を見失う。その子は華岳仙師に引き取られ，花関索と名付けられた。ある日，花関索は師の命を受けて九龍山に水汲みにいく。水には虫影がたびたび現れる。師の命により，その水を飲むと，たちまち九条の龍の力を得ることができた。華岳仙師は花関索に告げる。汝の父が四川で苦しんでいるから，いって救えと。

花関索が下山して，鮑家庄を過ぎるとき，鮑三娘に出会う。鮑三娘は立て札を掛けて武力を競うことを募る。花関索は怒ってその札を打ち壊す。そして両者は対決する。やがて鮑三娘は花関索を愛慕し，捕らわれることになる。花関索もまた鮑三娘を愛慕し，二人は結ばれる。折子戯ではこの戦いの場面だけをしばらく演じる（図版 52）。そして，このあと二人は四川にいって関羽を救う。

ここでは花関索の九龍の力よりも鮑三娘の颯爽とした姿がより鮮やかに浮き彫りにされる。

『王大娘補缸』　折子戯。『大補缸』『鋸大缸』ともいう。明清時代に流行した花部の小戯。明代伝奇『鉢中蓮』の一節である。王大娘は干魃が化身したむすめである。このむすめは磁器製の甕を持っている。それは伸縮自在，不思議な甕で雷が攻撃しても，そのなかに隠れてしまうと無事である。観音菩薩はこの干魃の妖怪を退治するために土地神に命じて甕直（なお）し屋に変身させる（図

▲図版 52　鮑三娘は花関索と戦うが，のちには愛慕して捕らわれる。

▲図版 53　王大娘（干魃）と甕直し屋（土地神）が軽口をいいあう。

▲図版 54　結婚した王丞相のむすめと李徳龍。

版 53)。甕直し屋は王大娘と会って冗談をやり取りする。観客を笑わせる演戯が挿入される。しかし，甕直し屋はわざと失策をしでかし，その甕を壊してしまう。こうして干魃の妖法は除去される。

『双龍記』　『双龍記』，一名『包公判逆龍』は滑稽味のある演戯で一貫している。李徳龍は科挙に合格して，秀才となる。そして，王丞相のむすめと結婚する（図版 54)。李徳龍はすぐに朝廷によばれて国家の大事を議論する。ところが，雲のなかにいてこの隙をうかがっていた東海の逆龍が李徳龍になりすまし，王家のむすめとねんごろになる。李徳龍は家に戻ってきて，男を発見する。二人の龍が互いにわれこそは本物と称して争いをはじめる（図版 55)。ところが，ここでは真の李徳龍が囚われの身となってしまう。

王丞相にはどちらが真の李徳龍か判断がつかない。王府（開封）の包公にことを委ねるが，包公も判定できない。

そのとき包公の母（図版 56）が包公に鏡を用いて照らせばよいと教えるが，妖風が吹いてうまくいかない。そこで包公は城隍廟にいく（図版 57)。しかし，ここでもらちが明かない。包公は城隍の責任を問う。城隍は観音仏母に助けを求める。すると，観音仏母はこれらが東海逆龍の仕業だということを知り，韋馱に命じて追跡させる。韋馱に追われた逆龍はうどん屋にやってくる。

そこには観音の化身した店主がいて，逆龍はつかまってしまう（図版 58）（図版 59)。王家のむすめは観音に導かれて，真の婿に会うことができる（図版 60)。最後に包公，李徳龍らが城隍廟にいき，ことの顛末を報告する。そして李徳龍一家は団円を遂げる。

この芝居は滑稽劇風に演じられる。ただ，城隍廟での真偽の判別，また，最後に観音仏母が悪しき者を懲らしめ，主人公一家の団円を導くという点には近世中国のごくありふれた庶民感情がよく示されているといえるだろう。

▲図版 55　逆龍の化した李徳龍（左）と真の李徳龍の争い。

▲図版 56　包公の母が包公（右から二番目）に策を授ける。

▲図版 57　包公は城隍廟にいって裁きを求める。中央は城隍神。

▲図版 58　李徳龍に化した逆龍がうどん屋（観音の化身）のもとにいき正体を曝す。

▲図版 59　姿を現した観音仏母。

▲図版 60　王大娘は真の李徳龍と再会する。

『沈香破洞』『沈香破洞』は禾洋村の四平戯の基本となる演戯で，必ず最後に演じられる。その梗概については，楊源村の四平戯を報告した際に取り上げた[19]。今回も，同じ演員により同じくらいの時間（およそ三時間）を費やして演じられた。三仙娘が神の身でありながら人界の男を選んで結婚すること（図版 61），兄により処罰された境遇のなかで子を産むこと（図版 62），そして，成長した子が母を尋ねて救出していくこと（図版 63）

▲図版 61　三仙娘は神の身でありながら劉文錫と結婚する。

▲図版 62　三仙娘は土地神の前で劉沈香を産む。

▲図版 63　黒風洞から救出した母を背負う劉沈香。

が一際，印象深かった。

なお，禾洋村では，全演目が終了したあと，大官あるいは皇帝などの登場人物が現れて次のような舞台封じのことばを述べる。すなわち

誠祝台下各位来的清吉，去的平安，家家清潔，戸戸平安
（舞台のもとにいらした皆さまにおかれては，きれいな身，吉多い身となり，無事にお帰りになられ，家内はきれいさっぱり，どのお宅にも平安が訪れますように）

という[20]。これはいかにも祭祀芸能の特色を伝えたものといえるだろう。

6. 禾洋村四平戯の特色

1. **慶祝のとき**　禾洋村では以前からもこの7月の三日間が一年のうち最大の節日である。正月にも増して人びとの慶祝の雰囲気が漂う。親戚友人も訪れ，以前は子供たちも新しい服，新しい靴を身に着けたという[21]。さながら正月なのである。

2. **奉納芸能**　東平尊王夫妻への奉納芸能という性格が顕著である。李氏の人びとはこころからこの神を信奉している。それは張巡という歴史上の人物であり，祖先神ではない。しかし，それに近い存在である。

3. **傀儡戯からの影響**　先にも述べたように禾洋村の四平戯は傀儡戯からの影響がある。

4. **殉死者への共感**　四平戯には，殉死した張巡に匹敵するような登場人物がみられる。たとえば『蘆花関』において戦死する薛応龍。こうした人物に人びとは共感を抱いていたことが知られる。

5. **女性の観劇と支持**　この地方の女性たちは伝統的に自由に祭祀演劇をみていた。これは宗族の認めるところであった。そして，家族の者が舞台に上がることを支持するばかりか，誇りにおもっている[22]。もちろんその背景には，芸能が祭祀の一環だということがある。こうしたことを禾洋村のある老婆が次のように明言している。

子供らのうち演戯ができる者はみんないって演じなくちゃね。。東平王が守ってくれてこそ，わが家は繁栄するのだから[23]。

一方，中国の北方の都市においては，女性たちは必ずしも自由に観劇することができなかった。このことはよく知られている[24]。ただし，禾洋村では女性が観劇することは自由であるが，今日まで女性が演員になったことはない。この点は楊源村と較べても一層，旧来の方式を踏襲しているといえる。すなわち，楊源村では今日までに四人，女性の演員が出たという[25]。

6. **女性の犠牲的な振る舞い**　演目の数は少ないが，女性の犠牲的な振る舞いが効果的に演じられる。『南陽関』における伍雲韶の妻。これは夫と子供を逃げ延びさせてみずからは戦陣のなかで死ぬ。『蘆花関』の樊梨花。これは出産後の身でありながら，赤子を背にして敵を迎え撃つ。

7. **母親的な位相の顕在**　女性の寛容，とくに母親的な位相が際立つ。『英雄会』の国母。

また，祖聡や姚剛の妹らは復讐を誓う兄たちに対して小皇帝への情を説いた。とくに漢朝の再興という大義をかかげて個々の私怨を克服させるところは，いわば『列女伝』のなかの女性たちのようである。ここでは少なくとも，女性たちは私よりも公を重んじている。こうしたことが大衆芝居のかたちであれ，くり返し演じられていたことは軽視してはならないだろう。姚剛の妹などは，英雄の姚剛よりも人間的により大きくみえる。こうしたものこそは女性たちの選んだ祭祀芸能だったとおもわれる。

8. **女主人公に生き方を学ぶ**　福建北部の女性たちは芸能上の女主人公の生き方を歌にして唱え，身につけていた。福建の屏南県には，たとえば『唱六十裙釵［裙釵（チュンチャイ）は女性の意］』という歌謡がある。そこでは次のような文句がみられる。

抱石投江銭玉蓮，玉潔氷清無二志，不為富貴守貞聖

これは『荊釵記』の主人公銭玉蓮が死んで貞節を示すことを歌ったものである。また

生死報仇焦桂英，落魄収容同衾帳，背情背義太無情[26)]

こちらは『王魁負桂英』で，変節した王魁を取り殺す女主人公焦桂英のこころを歌ったものである。こうした短い詞章のうちに芝居上の女性が60人も取り上げられている。要するに福建の女性はこうしたかたちでその主人公たちをみずからの生きるよすがにしてきたのであろう。ちなみに，こうしたことは，朝鮮の近世の女性たちがパンソリ『春香歌』などを通して主人公春香に親しみを感じていたのと通じる。

9. **子供たちの参与**　子供たちは芝居をみるだけではない。とくに，その祭儀への参与は際立つ。この点は楊源村にはみられない。3日目の最後の祭儀での手拍子と唱えごとによる神送りは他の地域にみられないもので，おそらく，より原初的な中国南部の祭祀のかたちを伝えているものであろう。注目に値する。

10. **文化大革命の克服**　文化大革命において四平戯のような地方の芸能が封建遺制とされたことはいうまでもない。ひとつの証言として次のようなものがある。1976年に四人組が打倒された直後，その慶祝のために禾洋村の四平戯団が楊源村にいって『英雄会』を演じた。ところが楊源村の幹部はこのなかの国母を盛り立てる演戯はすなわち江青を守ることだとして，演員に非難の文字を記した帽子を着けさせた。同時に，このとき，大量の台本が破棄されたという[27)]。こうした頑迷な官僚の意向，屈辱的な仕打ちにもかかわ

らず，禾洋村の男たちは国母が小皇帝を守るといった大衆芝居をつづけていた。それが禾洋村の母親たちの支持のもとにあったことはいうまでもない。今日の農村では，そうした男たちが生活の糧を求めて村を離れる傾向が一般的である。楊源村はすでにそうである。禾洋村はそれに較べると，まだ村の男たちが祭儀に参与する度合いが高いといえる。このような状況で，ここから先，どのようにしていくべきか。禾洋村は文革は乗り越えたが，今，ひじょうに大きな岐路に立たされている。

付記　本論は，2006 年度科学研究費補助（研究課題「東アジア祭祀芸能史論の構築」）による現地研究の一部を公開するものです。

註

1）楊源村の四平戯については，野村伸一「四平戯――福建省政和県の張姓宗族と祭祀芸能」『日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』No.37，慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会，2006 年で報告した。

2）葉明生・黄建興「政和県禾洋村的四平戯調査報告」『中国四平腔学術研討会論文匯編』，福建省芸術研究所，2006 年，353 頁。

3）同上，353 頁。

4）同上，354 頁。

5）1957 年から 1980 年までは，文化大革命のために祭儀がおこなわれず，福首も選ばれなかった。前引，葉明生・黄建興「政和県禾洋村的四平戯調査報告」，356 頁参照。

6）同上，357 頁。

7）禾洋村には古代の「同房撒帳」（同房落帳）の習俗がある。新郎新婦が初夜の部屋にはいる時，儀礼を司る者が，彼らの寝床の上に五穀，落花生，棗を撒きつつ，「撒帳歌」を唱える。そして両人の衣服をひとくくりにする。その歌詞は二人に早く子供が生まれて相公［大臣，宰相］，状元郎［科挙の首席合格者］，知州［州知事］になることを祈念するような内容である。たとえば，「撒米撒到東，床前一対好夫妻，今夜夫妻同床睡，早生貴子做相公，囉哩嗹，哩囉嗹」などという。同上, 354 頁，また王暁珊「宗族戯劇与農村女性的生存及文化現実」『中国四平腔学術研討会論文匯編』，福建省芸術研究所，2006 年，391 頁も参照。

8）同上，357 頁。

9）政和県桃洋村の陰陽先生の儀礼については先に記した（前引，野村伸一「四平戯――福建省政和県の張姓宗族と祭祀芸能」，41–44 頁）。

10）村民の教示では李英だが，意味不明のため改める。ここの陳李とは陳靖姑，李三娘すなわち女神「臨水夫人」のことである（前引，葉明生・黄建興「政和県禾洋村的四平戯調査報告」, 372 頁参照）。

11）同上，366 頁。

12）同上，367 頁。

13）同上，367 頁。

14）同上，368 頁。
15）同上，370 頁。
16）同上，368 頁。
17）前引，野村伸一「四平戯――福建省政和県の張姓宗族と祭祀芸能」，40 頁。
18）前引，野村伸一「四平戯――福建省政和県の張姓宗族と祭祀芸能」，38–39 頁。
19）前引，野村伸一「四平戯――福建省政和県の張姓宗族と祭祀芸能」，35–37 頁。
20）前引，葉明生・黄建興「政和県禾洋村的四平戯調査報告」，369 頁。
21）前引，王暁珊「宗族戯劇与農村女性的生存及文化現実」，387 頁。
22）同上，388 頁。
23）同上，388 頁。ここにはまた，演戯の上手なものはそれなりの報酬も手にすることができるという事情もある。
24）同上，386 頁。
25）同上，389 頁。
26）同上，392 頁。
27）帽子には「保国母，就是保江青」と記したとのことである。そうした幹部の視角は 1983 年になっても残っていて，当時，現地調査にはいった葉明生氏は四平戯をみることを許可されなかった。その理由は「四平戯をみることは，すなわちこの地の封建迷信活動を支持することだから」とのことであった。前引，葉明生・黄建興「政和県禾洋村的四平戯調査報告」，371 頁。